

紅樓夢研究をめぐる批判討論の經過と論點

前 お き

前年度に大學を卒業したばかりという新進の學徒が、聲名高い學者の研究を批判した論文に端を發したこの批判運動は、單に古典文學研究界に止まらず、廣く學術文藝界全般に伏在していたさまざまな問題が提起され討論されるといふ廣汎なものとなつた。そしてその中には、古典文學研究界が思想の上においても業績の上においても甚だしく「落後」し、社會的需要に應じ得ないこと、それが主として嘗て中國の學術界において支配的位置を占めていた胡適の影響を今なお脱し切れないでいるからであること、この影響を拂拭しなければならぬのは學術界全般の問題であること、更には文藝界一般に自由討論の雰圍氣が缺けており、新たに育つてくる勢力を輕視する傾向があつたこと、また向上と普及は併行しなければならぬという原則にの

つとり、研究を推進すると同時に、古典文學を眞に人民のものとするための教育が一層進められねばならないことなどが指摘され、討論された。これらの問題に關する論議は今なお彼の地において進行しつつある。

ここではその批判討論の展開を、中心となつたいくつかの問題ごとに分つて概觀し、それぞれについて代表的と目される論文の概要を示すことによつてその論點を明らかにした。引用した論文は必ず出所を明示し、更にこの運動に關する、限られたものではあるが目睹し得た限りの資料を一覽表にして末尾に掲げた。

I

古典文學者として、殊に紅樓夢研究家として名聲ある俞平伯の「紅樓夢辨」(亞東圖書館)が出版されたのは一九二三年のことであるが、解放後も彼は北京大學文學研究所にあり、一九五二年九月に「紅樓夢研究」(中國古典文學叢刊之一、棠棣出版社)を出版した。これは「紅樓夢辨」中の論文に多少の修改を加えて上中巻とし、これに新たな

論文若干を下巻として加えたものである。この頃から民族遺産として古典文學が大きく採り上げられはじめ、古典文學整理出版の第一陣として人民文學出版社（のち作家出版社に移管）から「水滸」が出版されたのはそれから丁度一ヶ月後のことであつた。翌五三年「三國演義」（十一月）に引續いて「紅樓夢」（一二月）が新たに出版され廣く讀まれるようになる（奥附に九萬部とある）數すくない研究書として「紅樓夢研究」はますます多くの讀者を得たであらうし、李希凡・藍翎の二人がこれに對する批判を發表するまでの二年間に六版を重ねたといわれる。更に俞平伯はこの頃各種の新聞雜誌から原稿を求められて、資料一覽のI、に示した「紅樓夢簡説」以下の一連の論文を發表した。この一覽は便宜上、發表日附の順によつたが、作家協會古典文學部の座談會（五四・一〇・二四）における彼自身と彼の助手王佩璋の發言によれば、これらの中では「紅樓夢簡論」が最初に彼自身の手によつて書かれたもので、これを胡喬木（著名な評論家）に批評してもらつて王佩璋に書き改めさせたのが「紅樓夢の思想性と藝術性」であり、

紹介（紅樓夢研究批判）

その他は概ねその後この二つの論文の趣旨を承けて王佩璋が代作したものであるという。（光明日報一一、一四掲載の記録による）——このように有名人に對しては無批判に求稿が集中し、その結果代作の論文が發表されるというような現象を生じたことは、李希凡・藍翎らの論文が初めは重んじられなかつたことと相俟つて、出版界における權威主義の横行として、反省批判の一つの中心となつた。——「紅樓夢研究」は三十年前の「紅樓夢辨」と本質的に何等變化はなく、しかもそれが胡適の「紅樓夢考證」（亞東圖書館「紅樓夢」附載、一九二二）を出發點として、このことは明らかであるが、「紅樓夢簡論」は所謂新紅學において通説となつている紅樓夢を曹雪芹の自傳とする説を否定し、進んで紅樓夢そのものの性格を分析しようとしたもので俞平伯としては一の飛躍を示したものである。しかしその觀點がやはり資産階級的唯心論的立場であると批判されているが、その具體的内容は次の項に譲ることにする。

俞平伯のほかにこの數年間に所謂新紅學的な紅樓夢研究

を發表した人々には周汝昌・吳恩裕らがあり(資料一覽I 參照)、殊に周汝昌の「紅樓夢新證」のごときは紅樓夢を作者の自傳とする觀念において最も徹底しているのであるが、それ程大きくとりあげられなかつたのはやはり俞平伯ほどの影響力をもつていなかつたからであらう。

II

これらの俞平伯の研究を最初に批判した李希凡・藍翎の合作になる論文「關於紅樓夢簡論及其他」は山東大學學報之一「文史哲」月刊二五期(五四・九)に發表され、文藝報(文學藝術界聯合會機關誌)一八期(五四・九・三〇)に轉載された。この二人はこれより一年程前に「紅樓夢研究」を批判した論文を文藝報に寄せたが掲載を拒否されたとのことである。(文聯・作協主席團聯席會議「文藝報に關する決議」五四・一二・八による)次いで二人は「光明日報」の副刊「文學遺產」二四期(一〇・一〇)に「評『紅樓夢研究』」を發表したが、この二つの文章は、極めて整然たる論文であつて、この後俞平伯の研究に對して數

多くの批判が發表されたが、この二人の指摘した範圍を出るものは稀である。ただ「人民文學」十二月號に掲載された胡念貽の「近年來の紅樓夢に關する研究における錯誤觀點を評す」は周汝昌・吳恩裕らに對する批判をも含み、最も包括的でよくまとまつている。今回の批判討論における從來の紅樓夢研究についての直接的な批判は、以上の三つの論文を讀めば概略を知ることができる。李・藍兩氏の二つ(註)の内容を要約すれば次のようなものである。

(註) この中に掲げた項目は要約する際に便宜上設けたもので、も
とからあるのではない)

A、「紅樓夢簡論」及び其他について、

1、紅樓夢の「現實意義」と俞氏の評價

乾隆時代は清朝衰頹の前奏として、封建統治集團たる官僚地主階級が内部から腐敗崩潰しつつあつた。曹雪芹の偉大さは、彼自身は過去の華やかさに留戀としていたにも拘らず、意識下において官僚地主階級の必然的に滅亡しゆく運命を豫知し、その矛盾腐敗の現實を藝術形象として描き出した點にある。われわれは作品中に表われた

作者の世界觀の落後的要素をもつて作品の現實的意義を論斷してはならない。作者の表現した藝術形象の眞實性から検討すべきである。古典作家の現實主義作品は往々にして彼の世界觀と一致せず、明らかに矛盾する場合すらある。(エンゲルスの指摘したバルザックの例を引用)俞先生は「擁護贊美するでもなく曝露批判するでもない」という曖昧な説を出しているが、これは「紅樓夢研究」において紅樓夢の思想性を否定した考えを更に進めたものである。「紅樓夢研究」では「水滸」を「過火的怒書」(はげしすぎる怒りの書)と貶しめ、「紅樓夢」の「怨みて怒らざる風格」を稱揚しているが、これは現實主義の批評原則を離れ、階級的觀點を離れて紅樓夢の反封建的な現實的意義を無視したものである。

2、俞先生は更に紅樓夢が現實主義の作品であることを否定した。先生は「紅樓夢の主要觀念は色と空である」といつているが、われわれも作者の虚無的宿命論的世界觀を否定するものではない。しかし曹雪芹の偉大なる所以は現實主義的創作方法がその落後的的世界觀を凌駕してい

る點にある。紅樓夢は「色空」觀念の具體化ではなく、いきいきした現實人生の悲劇である。

3、登場人物に對する觀方

俞先生は人物形象を作者が現實生活より概括創造し來つたものとは考えず、作者の思想觀念を表現したものともみる。(註。「紅樓夢簡論」では作者と登場人物との關係を將某をさす人と將某の駒に例えている)これも「紅樓夢研究」における考え方を一步進めたもので、例えば「紅樓夢研究」の中の「釵黛合一説」——寶釵と黛玉は作者の考える二種の美をそれぞれ象徴し、作者はこれを平等に甲乙なきものと考えていたとし、「兩峯對峙、雙水分流、各盡其妙、莫能上下」と評している。「紅樓夢研究」一一二頁)しかしながら舊紅學者の「右黛左釵」の説には牽強附會も多いとはいえ、作中で寶玉が寶釵を愛せず黛玉を愛しているのは明らかである。疑いもなく寶玉と黛玉とは作者の創造せる肯定的人物形象であり、封建官僚家庭の叛逆者である。彼等は禮教傳統に反對し、功名利祿を蔑視し、こうした共通の精神生活の中に愛し合うように

なつた。寶釵はこれに反し封建官僚家庭の要求に適つた「まともな」人間なのである。

4、紅樓夢の傳統性についての俞先生の見解

(1) 俞先生は「紅樓夢の主要觀念は色空であり、明代の金瓶梅はそれに直接の影響を與えている」といつているが、これは紅樓夢金瓶梅に對してのみならず、中國古典現實主義文學の發展に對する明らかな歪曲である。

(2) 俞先生はまた、寶玉と黛玉が西廂記を引用しておもしろい所を語る所(二三・二六・四九回)及び描寫の類似した所を例として、これを「西廂にもとづく」傳統性だといつているが、とすれば著名な作品を引用しさえすればその名作を繼承する傳統性といえるのだろうか、もしそうなら傳統性とは何の價値もない。

(3) 更に先生は「紅樓夢は更に古い文學の傳統を繼承しており、説部に限らず左傳・史記の類、樂府詩詞の類など、そして莊子・離騷は特に顯著である」とし二一・二二・六三・七八各回を擧げているが、これらは作者の文學的素養を指摘したにすぎず、文學上の術語とそ

の概念をまず明らかにすることが必要である。

(4) 此の外先生は西廂記・西遊記・水滸・金瓶梅などと描寫方法において類似する部分を擧げて紅樓夢の傳統性を論證している。

結局曹雪芹が「書き抜き」の専門家だという結論を得るだけで、紅樓夢の傳統性に關しては何等明らかな概念を得られない。

5、紅樓夢の傳統性とは、

われわれは文學の傳統性とは、(1) 現實主義創作方法の繼承と發揚、(2) 人民性の繼承と發揮、(3) 民族風格の繼承革新と創造、であると考へる。それは根本的には藝術的美學的態度的問題、すなわちそれと現實生活との關係である。

(1) 紅樓夢における人民性の傳統。

(a) これ以前の小説にも曝露性の作品はあるが、紅樓夢に到つて作者は最も深刻に封建官僚地主階級の生活内容を描き出し、更に封建制度における殆んどすべての問題に觸れている。——ここでも作者の世界觀から

なく、作品自體の客觀的な人民性を分析せねばならぬ。
(b)又紅樓夢の人民性は作者の創造し、肯定した典型の中にも表れている。彼は封建制度に反逆し、これを輕蔑する賢・黨を理想的人物とし、特に彼等の愛情を肯定した。これは又作者の封建制度に對する蔑視と反抗を表わしている。われわれは作者が歴史的な典型人物を創造を通じてここに到達したものと考へる。林黛玉は崔鶯鶯(西廂記のヒロイン)杜靈娘(還魂記のヒロイン)などの歴史的典型と同一類型に屬する。

(2)紅樓夢における現實主義的傳統

作者は自分の理解した生活の眞實のすがたを描き出そうとした。第一回の石と空々道人との對話は作者の現實主義的創作見解を反映している。作者はその世界觀の如何に係らず、生活の眞面目を歪曲することなく、本質上客觀的にそれを反映し得た。これも中國古典現實主義作家の貴重な傳統を繼承したものである。

6、結 び

俞先生は「紅樓夢研究」では舊紅學家を批判し、「紅樓

夢簡論」では紅樓夢を全く作者の家事と見做す新考證學派を批判した。これらの批判は當然價値あるものだが、俞先生の觀點と方法は、基本的には從來の紅學家の舊套を脱するものではない。考證的方法是時代の先後や眞偽を辨別するなど、一定の範圍内でのみ活動し得るものである。しかるに俞先生はそれを藝術形象の分析に應用した。その結果以上のような一連の反現實主義的形式的結論をもたらしたのである。

以上「關於紅樓夢簡論及其他」については、批判した二人の紅樓夢に對する見解が、より明瞭に表わされているので、やや詳しく述べたが「評紅樓夢研究」の方は簡單に事項を舉示するに止める。

B、「紅樓夢研究」を評す

1、この書の成果は「辨僞存眞」殊に續作四十回についての精密な考證にある。

2、しかし「紅樓夢」が近代古典現實主義文學の一高峯であることを認めず、單なる事實の記録、すなわち曹雪芹の自傳であると見做した。例えば

(a) 賈府の衰敗について三つの原因——「抄家」、「自殘」、「枯乾」を擧げている（「紅樓夢研究」一六三頁）が、これらは表面現象にすぎない。

(b) 人物について(1)雪芹が晩年窮困したから寶玉も貧困によつて出家したのでなければならぬと論じた。（同書一四六―一五〇頁）(2)寶釵黛玉については「關於紅樓夢論及其他」にのべたから略す。

(c) 手法について自然主義の寫生方法であるとし、作品全體を「好一面公平的鏡子」（同書一一七頁）と評した。

(d) 同様に紅樓夢が悲劇たる所以をも單にそれが事實を寫したからと説明している。（同書一二〇頁）

これらはいずれも現實主義文學の成果を歪曲している。

(e) また紅樓夢の「怨而不怒の風格」を推稱した（同書一二四頁）が、これは戰鬪性に富む現實主義の傳統を貶しめるものである。

3、「もともと文學を批評する觀方は偏りやすいものであるから甲は是とし乙は非とし原則はない」（同書一一五頁）といつてゐるが、文學批評は一定の階級的立場から

出發するので、原則がないということはありません。先生はかかる主觀的見解から出發し

(1)紅樓夢を自然主義寫生作品と見做し、その現實價值を否定し、作者の手法を歪曲した。

(2)階級的觀點から出發せず、形式主義的な部分をもつて全面を掩う瑣末な考證に終始し、紅樓夢の内容解釋を歪曲した。

(3)作者の動機を「是感嘆自己身世的」「是爲情場懺悔而作的」「是爲十二釵作本傳」の三つにまとめる（同書一〇五―一一〇頁）という形式主義に陥つた。

4、考證はある範圍内で文學批評を助けるものであるが、それを以て文學批評に代えようとするのは誤りである。

5、結び、——俞先生の自然主義主觀主義の見解は胡適を襲うものである。紅樓夢が現實主義の傑作であり、典型的社會的人間の悲劇であることを否定し、個別的家庭的個別的人物の悲劇として、自然主義的寫生的作品であると歪曲するのは、「新索隱派」の共通目標であつた。「紅樓夢研究」はその代表的な成果である。

今回の批判運動の口火を切つた二つの論文の内容は概ね以上のようなものであるが、これより約二週間後に鍾洛の「紅樓夢研究中の誤れる觀點に對する批判を重視せねばならない」という一文が「人民日報」(一〇・二三)(中國共產黨中央機關紙)に載せられた。「人民日報」は現在中國における刊行物の中で最も大きな影響力をもつており、この一文は今回の批判討論がこれだけ大きなものに發展した契機を作つたものとして注目すべきである。翌二十四日、作家協會古典文學部によつて「紅樓夢研究座談會」が開かれ、部長鄭振鐸をはじめ、吳組緜・馮至・舒蕪・周揚・何其芳・老舍・吳恩裕ら著名な評論家・作家・文學研究者に俞平伯・王佩璋・藍翎を交えた四十九名が出席した。ここでは李藍の論文に對し、例えば○自然主義の概念が明らかでないこと、○俞平伯の論文中からの引用の仕方に妥當を缺く部分があること、○歴史現象について更に具體的分析が必要であること、○曹雪芹自身の文藝觀についての評價が過大であることなどの反批判(以上主として吳組緜の指摘)も提出されたが、しかし○二人の批判が基本的に正しいこと、○そ

紹 介 (紅樓夢研究批)

してここに指摘された資產階級的觀念論的思想は文學研究界一般に深く根を下していること、○今後これを反省し、肅清しなければならぬこと、○更にその根源である胡適の反動的思想及びその研究方法に對し徹底的に鬭争すべきことを確認した。又この席上で俞平伯は自分の研究が興味から出發して枝葉的考證に終始したこと、及び社會的需要に應ずるために、あまり責任を負えない文章を發表し、不正確な意見をもつて讀者に影響を與えたことを自己批判し、自分に對して多くの批評が寄せられたことを感謝し、今後更に學習を進めて行くであろうと述べている。又藍翎は彼らに對する反批判に對し、○曹雪芹が理論上も現實主義を表明したというのは、從來の公式的・概念的創作方法に反對している點が現實主義の精神に合致するという意味であること、○自然主義と現實主義の問題については共產黨第十九回大會におけるマレンコフの發言(魏島・江川編譯「ソヴェト黨の發言の日本語譯がある」)が理解を助けるであろうこと、などの答えを出し、最後にわれわれは俞先生を尊敬していると結んでいる。(以上「光明日報・文學遺產」二期所載の記録によ

る)これ以後従来の紅樓夢研究に對する批判と同時に文學研究の態度方法についての根本的な反省、資産階級的思想特に胡適の影響に對する批判を問題にした廣汎な批判運動に展開したのであるが、「光明日報」は殆んど十一月中にわたつて特に「紅樓夢研究中の唯心論觀點を批判す」と題する欄を設けて、連日各地における討論の進行を報道している。その傳えるところによれば全國の大學その他の學校、文學藝術界聯合會及び作家協會の各地區組織、その他の各種の文化團體によつて討論會または座談會が行われており、この批判運動が非常に大規模なものであることが窺われる。

III

ここでこの廣汎な批判運動の展開については暫らく後まわしにして、傍流的に起つた、しかし根底においてやはりつながりをもつてゐるところの、「文藝報」に對する批判を通觀する。この問題を最初にとり上げたのはやはり「人民日報」で十月二十八日の同紙に袁水拍(すなわち馬凡

陀)の「文藝報の編者に質問する」が掲載された。これはさきの「關於紅樓夢簡論及其他」が文藝報に轉載されたときに添えられた按語に作者を軽んずる口吻が感じられることを不満とし、又同誌の五三年九號(五三・五・一五)に俞平伯の「紅樓夢研究」を推薦した文章が掲げられていることを擧げて、ともに古典文學研究中の唯心論を容認し、且つ頌揚するものであると述べ、またこれは有名人に對しては無批判に頭を下げ、無名の人や青年に對しては冷淡で完全無缺を要求して貶しめるところの「資産階級の貴族老爺式態度」であると批判した。更にこのような態度は今にはじまるものでなく、例えば嘗て新進作家李準のすぐれた作品「不能走那一條路」が現れたときにも類似の事情があつたことを指摘し、且つこれは單に「文藝報」のみの問題でなく出版界一般に「新たに育つてくる力」の前進を阻み「有名人を歓迎し、無名人を輕視する」風潮があることを指摘した。これに對し「文藝報」主編の馮雪峯はこの袁水拍の文章を同誌二十號(一一・七、この號は特に發行が遅れた)の卷頭に轉載し、その後「私が文藝報で犯した誤り

を検討する」という文章を掲げて袁水拍の指摘を全面的に認め、李・藍の論文に附した按語及び五三年九期の新書刊欄で「紅樓夢研究」を推薦した文章は自分が書いたことを述べて（後者には「靜之」の署名がある）自己批判をした。次いで二一號（一一・三〇）には編輯部として「熱烈に心から文藝報に對し嚴格な批評が行われることを歓迎する」という文章を巻頭に掲げた。一方十月三十一日から八回にわたつて開かれた文學藝術界聯合會（文聯）と作家協會（作協）の兩主席團の擴大聯席會議では紅樓夢の研究に關する討議と併行してこの「文藝報」の問題を採り上げ（これに關する主要發言は「文藝報」二二號に收められている）、十二月八日の最終的な會議においては郭沫若の「三つの提案」（この内容は次の項に譲る）が提出されると同時に「文藝報に關する決議」を採擇した。この決議では「文藝報」が有名人を重んじ、自らも權威をもつて任じて自己批評を肯ぜず、自由討論の展開を阻み、大衆を脱離した官僚主義的出版物となつていたこと、前に編輯委員會を設けていたのに主編の提案で解散してしまつたことなどを指摘したの

紹 介（紅樓夢研究批判）

ち、概ね次のような趣旨の六項の決議をした。

1、「文藝報」に新たに編輯委員會を設け、集體領導の原則を實施する。

2、新編輯委は新方針を提出し、從來の誤まりを克服する。

「文藝報」の内容は文藝批評を主とし、文藝を人民生活と密切に結びつけるものでなければならぬ。

3、作協主席團は「文藝報」に對する指導を改善する。

「文藝報」は仕事の上で政府文化部と密切な連絡を保つ。

4、「人民文學」その他の刊行物に文藝批評を強化させ、批評と自由討論の具體的計畫を提出させる。

5、作家協會、戲劇家協會、音樂家協會、美術家協會及びその各地方分會の刊行物、並びに各省市文聯の刊行物の編輯機構にこの決議にもとづいて仕事を檢査し、改善するようにさせる。

6、作協主席團は五五年春に第二次理事會を開催し、作協の指導工作を討論し改善する。

文聯・作協主席團の決議は以上のようなものであるが、「文藝報」二十三・四（合併）號にはこの決議を掲載する

と同時に同誌の編輯機構が改組されたことを發表した。これによれば康濯・侯金鏡・秦兆陽・馮雪峯・黃藥眠・劉白羽・王瑤の七人を以て編輯委員會を組織し、その中康・侯・秦の三人を常務編輯委員とするとなつてゐる。なおこれまでの主編、馮雪峯が依然として編輯委員會に名を連ねてゐることは、俞平伯が北京大學の研究所を去つたという報道をきかないことと並んで、今回の批判運動が決して個人攻撃ではないことを示してゐる。

IV

すでに述べたように、討論が廣汎に進行してゆく中に最初は俞平伯の研究に對して發せられた批判が、實は文學研究界更に學術界一般の問題であることが確認され、討論の中心はそうした一般的な問題に移つて行つたのであるが、文聯・作協・兩主席團聯席會議の最終的會合（一二・八）で、文聯主席郭沫若が發表した「三點建議」（三三）の提案は今回の一大批判運動の基本的な線を明瞭に示したものと見て注目すべきである。

第一、われわれは資産階級の唯心論的思想に對する鬭争を強固に展開しなければならぬ。

第二、われわれは廣汎に學術上の自由討論を展開し、建設的な批評を提唱せねばならぬ。

第三、われわれは新たに生れてくる力を育てることに努めなければならぬ。

そしてこのあと各項について敷衍し説明してゐるが、殊に第一項については學術界における胡適の影響を肅清すべきことを強調してゐる。李・藍の「紅樓夢研究を評す」ではすでに俞平伯の錯誤が胡適の影響であることを指摘してゐるが、陸侃如（山東大學教授）は十一月七日の山東大學における座談會においてそれが古典文學研究界一般の問題であることを述べ、「文藝報」（二一號）胡適が研究界に遺した弊害の主なるものとして次の二つ、すなわち(1)研究のための研究、考證のための考證、(2)古典傑作の積極的意義を歪曲し、作品の政治的内容及び鬭争性を抹殺したことを指摘した。前者はいわゆる「眞理のために眞理を求める」のスローガンをもつて、「歴史癖」「考證癖」を強調し、「科

學的」の美名にかくれて多くの人々を繁瑣な考證の中に逃避させたということであり、後者は「紅樓夢」を曹雪芹の自傳として自然主義の傑作であると主張し、或いは「水滸」の作者施耐庵や、「楚辭」の詩人屈原の存在を否定したという類を指す。李長之（北京師範大學教授）の「胡適の思想面貌と國故整理」（「光明日報」一二・二八）では更に詳しく、(1)胡適は民族的虛無主義者であり、帝國主義勢力の御用學者であること、(2)國故整理の反動性、(3)國故整理を口にしたが實は何ら業績を擧げていないことを述べている。胡適に對しては文學研究界における影響のみならず、哲學歴史學の方面における影響が検討され、その思想的出發點であるプラグマチズムに對する批判に及び、更に實際の政治活動までが批判されている。これらの方面に關しては更に人を得て詳細な解説がなされることを希望する。

古典文學の現状を一般的な形で反省しているものとしては陸侃如ら山東大學教師の集體討論（一一・七）を同大學の梁希彥が整理した「われわれの紅樓夢研究に對する初步

意見」（「文藝報」二二號）があり、その中では資産階級的唯心論思想が文藝創作及び文藝研究に對する態度の上に表われたものとして次の三種を擧げている。

- 1、藝術のための藝術・研究のための研究という觀點。
- 2、矛盾を抹殺せる階級調和論。
- 3、不可知論的觀點。

この討論會における個々の發言は五五年一月の「文史哲」に發表すると附言してあるが、同誌を今見ることができないのは残念である。

また王瑤（北京大學教授）の「古典文學研究工作的現状を語る」（「文藝報」二三・四號）は問題を具體的に説明してあつて極めて興味深い。次にその要旨をしるす。

「談古典文學研究工作的現状」

紅樓夢に關する討論の中に古典文學研究が現實社會の發展に對して著しく落後しており、しかもすべての學術部門中おそらく最も甚だしいことが曝露された。ここにその原因を検討してみる。

(1)他の學術部門と對比してみると、a、經濟學・文

藝學は五四以來共產主義文化思想が次第に指導的地位を占め、三十年間に多大の成果を擧げてゐる。b、自然科學は嘗て資産階級思想の影響が甚だ大きかつたが、解放以後科學院の指導の下に蘇聯を學ぶのに特別な利便と有利な條件をもち、この數年間にすばらしく發展した。c、中國の具體的歴史發展に關する部門は蘇聯を學ぶにそのような利便をもたない。その理論及び研究經驗を學びつゝも創造的研究を要する。しかし中國史及び中國思想史をマルクス主義をもつて研究しはじめたのは第二次國內戰爭(一九二八年より一九三七年の抗日戰爭)前後のことであり、郭沫若の「中國古代社會研究」(註、一九三〇年初版)はその開山的著作である。そしてなお幾多の問題を残しつつもかなりな成果をみ、すでに新觀點をもつてする中國通史及び中國思想史の著作も現れている。d、これに對し、基本的にマルクス主義の觀點方法をもつてする中國文學史はまだ一冊もないし、にわかになみ出すことも困難である。第二次戰爭のころ、この種の研究を試みた人もあつたが、中途に放棄するか、胡適の思想にまきこまれて

しまつた。だから研究の開始は正確には解放以後のことであり、歴史や哲學などと比べても二十年は遅れている。今なお試験的摸索的段階である。

(2)ではなぜこのように開始が遅れたのであろうか、文學戰線においては五四以來無産階級思想が常に指導的地位を占めていたが、革命闘争が激化するにつれ、革命文化戰線の活動は地下に在つた。そこで古典文學研究領域内に陣地を占有することができなかつたのである。魯迅は早くから古典文學研究の社會主義文化建設における重要性に氣づき、中國文學史の著作を志していたが、こうした環境の下では遂に成し得なかつた。

(3)解放以前の古典文學研究界では、胡適一派の學者たちが「國故整理」を標榜し、學問の研究について資産階級的な思想と方法をばらまいたのであるが、その成果は小説戯曲以外は清朝の學者たちのそれを越えていない。しかも小説戯曲においてすら、a、作者の身世經歷の考證、b、版本目録の校定、c、ものがたりの源流演變についての考察、の三つの範圍にとどまる。

(4) 現状——古典文學の研究者は長期の訓練と經驗が必要であるが、作家協會古典文學部の調査では、古典文學に關する論述をもつ研究者は約百二十人であり、數千年來の文學遺産の豊富さ、及び六億人民の文化的需要を考えなくても、非常に少なすぎる。しかもそのすべてが思想上・方法上、資産階級の影響を受けて來ており、正確な研究方法を把握することは實質的には思想改造の問題である。——しかしながら不斷に邁進しつつあり、今回の紅樓夢に關する討論もその顯著な例である。且つ一方に新しい研究者が次第に成長しつつある。「光明日報」の副刊「文學遺産」には非常に多くの原稿が寄せられるが、その筆者は殆んどさきの百二十人以外の人である。この「文學遺産」は今のところ水準が高いとは言えないが讀者たちに非常に歡迎されており、また古典文學名著の刊行以來古典文學に對する關心が殊に青年たちの間に極めて普遍的になつて來ている。このことは同時に古典文學の分析と研究が緊急の社會的需要であることを意味する。

紹介（紅樓夢研究批判）

(5) 解放以來の研究の發展狀況——解放後に最も早く出た文學史的著作は「中國人民文學史」であるが、その中ではただ樂府・民歌などが講じられただけで、杜詩や「紅樓夢」のような作品は殆んど採り上げていない。これは古典文學中の人民性に對する理解を誤つている。また解放後に最も早く採り上げられた作家は白居易であるが、それは彼の諷諭詩の中に明らかに人民に同情的な詩句があるからで、その他の例えば「長恨歌」や「琵琶行」などをいかにみるべきかは今なお未解決である。この數年間に採り上げられた古典作家作品は、第一段階は白居易・杜甫・「水滸」を代表とし、第二段階は李白・陶淵明・「紅樓夢」を代表とする。前者は作品中の人民性を字句の上に求めることができるので、あまり論争されることはなかつた。現在第二段階にはいつているが、これらの作家作品は概ね肯定されてはいるものの、その觀方はなお紛岐している。何故なら、その中の人民性は表現が複雑で曲折しているから、具體的な分析を要し、現在なお討論の段階にある。第三段階はおそらく蘇軾と「三

國演義」であろう。なぜならこれらは目下みんなが困難を感じて近づくとうとしない問題だから。ここにもわれわれの古典文學研究の現在の水準が反映されている。

朝鮮戦争のころ、愛國主義を宣傳するあまりに舊文化に對し兼收併蓄の傾向があり、一部の封建性の糟粕のごときものまでが不當に稱揚されたことがあつたが「三反」(官僚主義・汚職・混戦に反對する運動、一九五二年二月より五年六月まで全國的に展開された)以後この傾向は改められた。第二次文學藝術工作者代表大會(五三年九・十月、「文藝報」五三年一九號はその特輯)以後、古典學習が一般に重視され、ことに青年の間で古典文學が廣く讀まれるようになった。しかし、指導的な正確な分析的研究が缺けており、又文藝界もこの方面に對する注意が不十分で、例えば「文藝報」はこれまでに古典文學關係の文章をいくらか載せるには載せたが、質量ともに不十分であり、しかも十分な討論をさせないので、あまり正確でない文章にも「權威」性をもたせる結果を生じている。

またこれまでは、古典文學研究に關しては「結論」的性

質をもつた著作のみ出版しているが、このような慎重な態度は實際的でなく、却つて研究工作の進展を阻害している。私は國家出版機關がその選題計畫において、現實の水準に基いて古典研究方面の出版を行うよう提議する。作家協會の古典文學部はもう少し活潑に仕事をしてもいい。作協は作家たちの學習や生活體驗や作品討論などについての活動をしているが、古典文學部はこの種の活動を殆んどしていない。「文學遺產」「光明日報」副刊)を編輯することが古典文學部の唯一の活動のようであるが、これも當然力を注ぐべきであるけれども、現状からみて古典文學専門の期刊——「歴史研究」のごとき——が創刊されるべきである。その外研究工作の現状に注意し、發表された著作についての討論や批評、古典教育の問題、研究工作者の連絡や補助などの仕事をもつと強化すべきである。

V

今回の批判運動は見方によれば民族遺産として古典文學

を大量に出版して大衆に提供したのに、大衆を指導する文學研究が不足していたことがそのきつかけになつたともいえると思うが、従つて文學研究に對する反省批判と共に古典教學問題が採り上げられているのも當然であろう。この問題については、はやく十一月十三日の「人民日報」に李庚の「青年が古典文學作品を閱讀することを正確に指導せよ」という文章が發表されていたようであるが、これはこの稿を成すまでに見ることができなかつた。「文藝報」編輯部は十一月二十五日にこの問題に關する座談會を開催したが、この座談會には作家協會張天翼、作協文學講習所蕭殷、北京大學王瑤をはじめ、「文藝學習」・「語文學習」・「中國青年」・「中學生」・「工人日報」等工農階級や青少年を對象とする出版物の編輯者及び青年團や中學校關係の代表十四人が出席している。その席上では、文學を讀みなれない人々が古典文學に對して發する極めて素朴な疑問などもいろいろ採り上げられて丁寧に検討されており、古典を廣汎な大衆のものにしよう——言いかえれば一般大衆の教養をそこまで高めようとする健康な意欲が窺われる。

紹介（紅樓夢研究批判）

（「文藝報」二十三・四號にその記録がある。）この問題は第二次文代大會ですてに採り上げられ、その席上で周揚は古典文學藝術の整理研究はわれわれの重要任務の一つであると述べたあとで、「民族的古典文學藝術遺産を整理研究することは、一つには新しい文學藝術の創造と民族傳統とを結びつけるためであり、一つにはこれらの傳統的藝術文學を科學的な整理加工を経て再び人民大衆の中に普及させ、今日の人民の有益な共同の精神的財産たらしむるためである。」と述べ、その後で「われわれのあらゆる文學藝術工作において、提高（向上）のみを目指して普及に注意しないのは誤つた道である。毛澤東が指示した『文藝は工農兵のために服務する』という方向及び提高と普及の正確な關係についての規定、——『普及の基礎の上に立つて提高（向上）する』と『提高（向上）の指導の下に普及する』とは、われわれの文學藝術事業において嚴格に従わなければならない原則である。」と述べている。（「文藝報」五三年一九號）このような傾向は今回の批判運動を通じて顯著になつて來たことで、例えば從來大衆の文藝生活と結合して、

専ら創作の發表や現代文學に關する指導を行つて來た刊行物——「文藝學習」や「光明日報」副刊の「文藝生活」などに、しばしば古典に關する紹介批判や讀者の感想などが載せられるようになってゐる。これは解放後「識字教育」から出發し、あらゆる場所における學習グループの活動が非常に廣汎且つ活潑なものとなり、文藝教育が相當に普及してゐる今日、更に大衆の文化水準の向上を目指す動きとして注目すべきであらう。

あとがき

從來の紅樓夢研究に徹底的な批判を行つたからには、新しい觀點よりする紅樓夢研究が現われなければならぬ筈であり、この批判がはじまつてから後に紅樓夢そのものを論じた文章を資料一覧の最後に掲げたが、本格的な分析研究はなお今後に俟たねばならないであらう。しかしながらこの數年來とみに増加しつつあつた古典文學に關する出版はおそらくこれからますます活潑になるであらうし、王瑤が提議した作家協會の古典文學専門の期刊もあるいは實現

するかもしれない。また發表された研究に對し、批判反批判と活潑に討論される傾向はすでに種々の刊行物を通じて感じられるし、一般向きの出版物に古典關係の文章が増えて來たことは前項に述べたとおりである。總じて今回の批判運動——それは現在もなお進行しつつあるのだが——の成果といふべきものは今後大いに注目されてよいと思ふ。

關係資料一覧

(附記、この一覽における分項は一應本文中の項目と照應するようになつてゐるが、いくつもの問題にまたがつて論じたものも多いためので嚴密な分類はできない。なお發行年月のうち年を略してゐるのは一九五四年、「」を附したものは單行本、文學遺產とあるのは光明日報副刊文學遺產、人民・光明とあるのは人民日報・光明日報の略。また「文藝報」二十三・四號は合併號である)

I

- 胡適 紅樓夢考證(「紅樓夢」附錄 亞東圖書館一九二二)
 跋乾隆庚辰本脂硯齋重評石頭記鈔本(胡適論學近著第一集下 商務印書館 一九三五)
 俞平伯 「紅樓夢辨」(亞東圖書館 一九二三)
 同 「紅樓夢研究」(棠棣出版社 一九五二)
 同 紅樓夢簡說(天津大公報 一九五三、一二、一九) 未見

- 同 我們怎樣讀紅樓夢（上海文匯報 一、二五）未見
 同 讀紅樓夢隨筆（香港大公報 一、四月連載）未見
 同 紅樓夢的思想性和藝術性（東北文學 2 二月）未見
 同 紅樓夢簡論（新建設 3 三月）
 同 曹雪芹的卒年（文學遺產 1 三、一）未見
 同 紅樓夢評介（日本語版紅樓夢について）（人民中國 6 六、二五）
 同 輯錄脂硯齋本紅樓夢評註的經過（文學遺產 11 七、一〇）
 周汝昌 「紅樓夢新證」（棠棣出版社 五三、九）
 吳恩裕 曹雪芹的紅樓夢與政治（新觀察 16 八月）
 同 曹雪芹生平二三事（同 17·九月）
 同 永忠弔曹雪芹的三首詩（文學遺產 91 九、七）
- II
- 李希凡、藍翎 關於紅樓夢簡論及其他（文史哲 9 文藝報 18 九月）
 同 評紅樓夢研究（文學遺產 24 一〇、一〇）
 鍾 洛 應該重視對紅樓夢研究中的錯誤觀點的批判（人民日報 一〇、二三、文藝月報 11 十一月）
 高韻陶 對關於紅樓夢簡論及其他和評紅樓夢研究兩文的一點補充意見（文學遺產 27 一〇、三一）
 編輯 中國作家協會古典文學部召開的紅樓夢研究座談會記錄（文學遺產 29 一一、一四）
 余冠英 爲什麼不能從大處着眼？（文學遺產 29 一一、一四）
 紹 介（紅樓夢研究批判）

- 聶紺琴 論釵黛合一論的思想根源（文藝報 21 一一、一五）
 王 瑤 從俞平伯先生對紅樓夢的研究談到考據（同右）
 范 寧 俞平伯「紅樓夢研究」是反愛國主義的（同右）
 嚴敦易 從紅樓夢辨到紅樓夢簡論（同右）
 余士銘 錯在哪裡（天津大公報 一一、二〇）
 李 易 評俞平伯先生對紅樓夢後四十回的一些看法（文學遺產 30 一一、二一）
 王達津 「怒而不怒」（天津大公報 一一、二〇）
 顧學頤 評俞平伯在詞的研究方面的唯心論思想（文學遺產 31 一一、二八）
 劉衍文 從對俞平伯研究紅樓夢的批判談起（同右）
 王佩璋 談俞平伯先生在紅樓夢研究工作中的錯誤態度（同右）
 丁 力 大都是俳優文學嗎！（文藝報 22 一一、三〇）
 吳組細 評俞平伯先生的紅樓夢研究工作並略談紅樓夢（文學遺產 32 一一、五）
 張嘯虎 俞平伯研究紅樓夢的錯誤的又一根源（人民日報 一二·八）
 程千帆 從「紅樓夢的風格」看資產階級的美學觀點（文藝月報 12 十二月）
 蕭 山 俞平伯的錯誤文藝思想的一貫性（人民日報 一二、二〇）
 李希凡、藍翎 新紅學的功過（人民日報）
 胡念貽 評近年來關於紅樓夢研究中的錯誤觀點（人民文學 21 十二月）
 褚煥傑 評紅樓夢新證（文學遺產 37 一九五五、一、一六）

周培桐 駁紅樓夢新證中的假定(文學遺產 39 一九五五、一、三〇)

III

袁水拍 質問文藝報編者(人民日報 一〇、二八 文藝報 20 一、七)

馮雪峰 檢討我在文藝報所犯的錯誤(文藝報 20 一一、七)

文藝報編輯部 熱烈地誠懇地歡迎對文藝報進行嚴厲的批評(文藝報 21 一一、五)

文藝報記者 批判文藝報的錯誤和缺點(文藝報 21 一一、三〇)

編輯部 一年來讀者對文藝報的批判(同右)

臧克家·劉白羽·胡風·康濯·袁水拍·老舍 對文藝報的批評——

文聯作協主席團擴大聯席大會上發言(同右)

周揚 我們必須戰鬥——擴大聯席大會上發言(人民·光明 一、二、三〇 文藝報 23、4 一一、三〇)

文聯·作協聯席大會 關於文藝報的決議(人民·光明 一一、九)

文藝報 23、4 一一、三〇)

鍾敬文 文藝報刊載紅樓夢研究介紹文所犯的錯誤(光明日報 一二、一一)

朱贊庭等 對文藝報的批評(文藝報 23、4 一一、三〇)

IV

舒蕪 堅決開展對古典文學研究中資產階級思想的鬭爭(文藝報 20 一一、七)

IV

陳友琴 我參加紅樓夢研究座談會以後的感想(文學遺產 28 一一、七)

編輯 中國作家協會古典文學部召開的紅樓夢研究座談會記錄(文學遺產 29 一一、一四)

吳小如 我對於討論紅樓夢問題的認識和感想(文藝報 21 一一、一五)

黃蘗眠 我在這次紅樓夢研究的討論中所聯想到的和體會到的(同右)

林夢雲 從紅樓夢的討論所想起的(文藝學習 8 一一月)

記者 不能容忍資產階級思想繼續盤踞古典文學研究的領域——關於紅樓夢問題討論的綜合述評(同右)

方隼 堅持原則堅持批評(文藝月報 11 一一月)

若望 考證引入的迷宮(同右)

社論 堅決和文藝領域中的資產階級思想作鬭爭(同右)

魏建功 批判紅樓夢研究中唯心觀點的意義(光明日報 一一、二六)

梁彥 「幽居」和「覆斷」(天津大公報 一一、二七)

郭沫若 三點建議(人民·光明 一一、九 天津大公報 一一、一五 文藝報 23、4 一一、三〇 科學通報 五五、一一)

茅盾 良好的開端(人民·光明 一一、九 天津大公報 一一、一五 文藝報 23、4 一一、三〇)

郭功照 所謂不能有先入之見(文藝報 23、4 一一、三〇)

胡家林 是新事物還是現象(同右)

鄧學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

郭學初 是清醒的時候了(同右)

羅 蓀 鬪爭需要力量(文藝月報12 一二月)

田 廬 必須開展文藝批評和自由討論(同右)

潘梓年 資產階級思想的反動性、危害性(光明、哲學研究23 一
九五五、一、二六)

陸侃如 嚴厲地肅清胡適反動思想在新中國學術界裡殘存的毒害

(文學遺產27 一〇、三一)

同 胡適反動思想給予古典文學研究的毒害——山東大學座談

會上發言(文藝報21 一一、一五)

李 鳳 清除胡適派思想流毒(文藝學習8 十一月)

陳元暉 肅清古典文學研究中實用主義的毒素(文藝報22 一一、
三〇)

羅根澤 批判胡適文學觀點和治學方法——兼評俞平伯先生的紅樓

夢研究(文學遺產35 一二、二六)

李長之 胡適的思想面貌和國故整理(光明日報 一二、二八)

蔡 儀 胡適思想的反動本質和它在文藝界的流毒(文藝報23.4 一
二、三〇)

何幹之 五四以來胡適派怎樣歪曲了中國古典文學(光明日報 一
九五五、一、七)

王 瑛 斥胡適對儒林外史的詆譭(文學遺產37 一九五五、一、
一六)

詹安泰 批判胡適所謂科學的方法及其他(文學遺產38 一九五五、
一、二三)

紹 介(紅樓夢研究批判)

張志岳 必須認清胡適考據學的反動性(同前)

王文琛 保衛我們珍貴的文學遺產——批判胡適對我國古典小說戲
曲的歪曲(文學遺產39 一九五五、一、三〇)

王若水 清除胡適反動哲學遺毒(人民日報 一一、五)

任繼愈 胡適實驗主義思想方法批判(光明、哲學研究19 一二、
一)

周一良 批判胡適反動歷史觀(光明、史學15 一二、?)

孫定國 批判胡適哲學思想的反動實質I II III(光明、哲學研究20
21 22 一一、一五 一二、一九 一九五五、一、一二)

汪子嵩等 批判胡適反動政治思想(人民日報 一二、一七)

楊正典 徹底肅清反動哲學思想實用主義的影響(同前 一二、二
〇)

曾文經 五四運動前後胡適的政治面目(同前 一二、二七)

編輯 批判胡適主觀唯心論的歷史觀與方法論——北京大學歷史
系教師座談會發言摘要(光明、史學47 一九五五、一、
六)

張 沛 學者——政治陰謀家——胡適在思想和政治上的反動本
質(人民日報 一九五五、一、一五)

馬清健、盧婉清 胡適反動思想的實質(文藝學習 一九五五、一、
一)

王慶淑 批判胡適的不朽論(光明、哲學研究23 一九五五、一二六)

徐仲勉 胡適是怎樣忠實地爲帝國主義效勞的(光明日報 一九五
五、一、二八)

鄭林莊 胡適反動思想對我的影響(光明日報 一九五五、二、一)
童書業 批判胡適實驗主義考據學(光明、史學49 一九五五、二、三)

蔡尙思 胡適反唯物論的歷史觀點批判(同前)
李 達 「胡適反動思想批判」(湖北人民出版社) 未見

梁希彥整理 我們對於紅樓夢研究的初步意見——山東大學教師集
體討論(文藝報22 一一、三〇)

王 瑤 談古典文學研究工作的現狀(文藝報23.4 一二、三〇)
吳小如 我所看到的目前古典文學研究工作中的一些問題(同前)

V

郭紹虞 從批判紅樓夢研究問題談到古典文學教學問題(光明日報
一一、三〇)

編輯部 加強對青年閱讀古典文學作品的指導——記關於青年閱讀
古典文學作品指導工作座談會(文藝報23.4 一二、三〇)

張天翼 關於指導青年閱讀古典文學作品的幾點意見(同前)

VI

劉秉義 試論賈寶玉林黛玉婚姻悲劇的根本原因(文學遺產30 一
一、二二)

谷 峪 談談賈寶玉(光明、文藝生活33 一一、二七)

許之喬 紅樓夢是屬於人民的(文藝學習8 一一月)

顏振奮 對賈寶玉性格的分析(光明、文藝生活34 一二、四)
鞠 盛 賈寶玉是現實逃避者嗎?(同前)

俞 多 試論林黛玉和薛寶釵的思想性格(同前35 一二、一一)
慎 之 試談紅樓夢的傾向性(文學遺產35 一二、二六)

馮沅君 談劉姥姥(同前)

王崑崙 花襲人論(文藝報23.4 一二、三〇)

李希凡·楊建中 論紅樓夢悲劇性衝突的時代意義(文藝學習9
一一月)

余樹聲 略談林黛玉(同前)

老 舍 紅樓夢並不是夢(人民文學 一二月)

白 眉 賈寶玉的典型意義——紅樓夢札記(同前)

林冬平 紅樓夢的現實主義成就(同前)

鞠 盛 從寶玉挨打看林黛玉與薛寶釵(文藝學習 一九五五、二)

黃 犁 賈政薛寶釵爲什麼是反面人物(同前)

靜 儀 從賈寶玉談到怎樣看古典作品裏的正面人物(同前)

王定一 尤三姐的反抗精神(同前)

周培桐·張葆莘·李大珂 劉老老是一個人——評馮沅君先
生「談劉老老」(文學遺產39 一九五五、一、三〇)

(京都大學 村上哲見)